

摘 録

会 議 名 令和元年度第1回刈谷市歴史博物館協議会

日 時 令和元年7月10日(水) 午後2時00分～3時30分

場 所 歴史博物館 1階講座室

出 席 者 協議会委員：西宮秀紀(会長)、吉田俊英、堀江登志実、山田孝、清水英弥、石橋保尚、市川明日香、吉田永子、成田年秀(敬称略)

事務局：西村日出幸(市民活動部長)、杉浦隆司(文化観光課長)、加藤隆司(歴史博物館長)、近藤亜由子(歴史博物館長代理)、五十嵐正也(学芸員)、山下智也(学芸員)

内 容

1 館長挨拶、西宮会長挨拶

2 委員自己紹介

3 議題

(1) 開館後の状況について

平成31年3月24日の開館後の状況について説明した。

(A委員) アンケートの回答数が少ないが、この数だと実態を反映していないのではないかと。

(B委員) アンケートを書く人は、苦情がある人かすごくよかったと思う人しかいない。何年かに1回は来た人全員にやるようなアンケートをすべき。

(C委員) 入館者数3万人に対して、126人からしか回答がない。統計データは重要なのでできるだけ多くの方が回答するようにすべき。

(B委員) アンケートの項目だが、最寄駅からどうやってきたか、バスなのか車なのか徒歩なのか、という項目を作るべき。

(D委員) 刈谷市内のどこから来たかということもアンケートで聞くべきではないかと。北部、中部、南部の3区分でよい。

(B委員) 項目に「今後どのような展覧会をしてほしいか」という欄を作ってほしい。

(2) 今後の予定について

令和元年度の今後の予定について説明した。

(E委員) SNSや知人からの口コミが少ないということだが、企画展示室の中にインスタ映えスポットを作り、拡散しやすいようにすればよいのではないかと。

(B委員) 年4回すべてがオリジナルの展覧会というのは難しい。1～2年に1本は巡回展を入れたほうがよい。巡回展だと他館と費用が折半できるし、図録も合同で出すことができる。毎年4回自館発の企画展を行うとなると、アイデアなどが枯渇し、息切れする。

(C委員) 春秋に大規模なもの、夏冬に小規模のものというふうに強弱をつけるべき。先回の協議会でも言ったが、来年度以降に活かしてほしい。

(F委員) 夏冬は小中学生をターゲットにしたほうがよい。

(C委員) 巡回展は集客の面でもよいが、何より他館の学芸員と交流することで、風通しがよ

くなる。

(B委員) 他館の学芸員と連携することで、学芸員の勉強にもなるし、ひいては館全体が活性化する。

(D委員) 今年度の展覧会はカタログのようなものを出すといわれたが、来年度以降図録は出すのか。毎回とは言わないまでも、大きい企画展をやる際には出してほしい。

(C委員) 図録は博物館の生命線であり、学芸員の腕の見せどころである。写真集にしたとしても10ページぐらいにはなるはずである。少し無理をしても図録は出すべきである。

また、常設展の図録も早く作成してほしい。図録があれば、10年、20年先に開館当初にどのような意図で常設展を展示したかを示すことができる。

(A委員) 年報と紀要は大切である。岡崎市立美術博物館では、年報と紀要を隔年で出している。本当は毎年出したいのだが。館の活動をまとめることは大事である。年報と紀要を一緒にして出しているところもある。

(C委員) 年報は毎年報告するのだから年報というのである。義務とまでは言わないが、論文1本でもいいので、紀要を出すことが大事である。必ず毎年紀要は出していただきたい。

(B委員) 市史編纂が終わって久しいと思うが、積極的に新しい調査を行ってほしい。少しずつでもよいので、調査を行うことが大事。知立市などは昔刈谷藩領であったように、刈谷市内にとどまらず、広い意味で市内外にも目を向けて調査してほしい。

4 その他

最後に、全体を通しての意見をうかがった。

(G委員) 小学生が来館して満足すると、必ず家で家族に話をする。そうすると今度は家族でまた来館する。子どもがまず興味を持つような展示をしてほしい。また、婦人会にももっと宣伝すればよいのではないか。

(H委員) 簡単工作について、勾玉づくり、プラ板づくりを固定化するのはよくない。あまりメニューが変わらないと来なくなるので、定期的に変えていった方がよい。

(D委員) 障害者の対応について、ボランティア団体に館の方から接触して、障害者の方に積極的に来館してもらえるようにするとよい。

(B委員) 名古屋ポストン美術館にいたころ、「車いすデー」や「ベビーカーデー」を設け、車いすのかたを優先したり、ベビーカーを展示室内に持ち込んで自由に声を出したりしてよい日を作った。大変好評であった。半日でもよいので、こういう取り組みを積み重ねていくとよい。

(I委員) ある館では、週に2~3日障害者団体を受け入れている。通路幅をしっかりと確保するだけで来てくれるようになる。視覚障害者の対応が難しい。触ってもらえるものがあるのがよいのだが、現在対応協議中である。展示品を触りたいという要望は多い。

(B委員) 別の館でも同様の問題があった。手探りでよいので、対応してほしい。とある博物館の場合は、講座の時は必ず手話対応をしている。障害者にも開かれているということをアピールすべきである。また、盲導犬を展示室内に入れるかど

うかだが、犬じゃなく介護者であるということで、職員が付き添って、盲導犬も一緒に展示室内に入ってもらった。交通局も同じ判断で盲導犬は介護人として扱っている。

(D委員) ある大学の博物館はほとんどの展示品が触ることができる。視覚障害者の方の要望が多くて、触れるようにしたと聞いている。土器の破片などは触らせればよい。

(B委員) 汚れるのがいやならば、触る前にウェットティッシュで手をきれいにしてもらえばよい。拒否から入るのではなく、できる限り対応できるようにしてほしい。

(E委員) 小さい子を持つ親が、休みの日に雨とか降って外で遊べないとなると、「水族館に行くか」となる。その時の選択肢に博物館が入るように、小さい子がいろいろと体験できるような仕掛けをしてほしい。

(F委員) ある館は雨の日の方が来館者数は多い。それは、イベントを多くしているのに加えて、駐車場があり、カフェが併設しており、子育て世代の母親の憩いの場になっているからである。